

体験型海外教育実地研究 第2・3学年音楽『『静寂』を感じて『日本の音』を楽しもう!!』・
教育学研究科学習科学専攻カリキュラム開発専修 矢野 和佳子

1. はじめに

体験型海外教育実地研究を受講した動機として、まず、海外の空気に触れてみたいという思いがあったということが挙げられる。外国人と関わる機会が増え、国際理解の必要性が主張される中で、実際にその場に行ってみないと何も分からないのではないかと感じたからである。

もう1つの動機として挙げられることは、外国人とのコミュニケーションを楽しみたいという気持ちである。積極的に人と関わるのが苦手な筆者だが、必然的にコミュニケーションを取らなくてはならない場面に身を置くことで、克服できるのではないかと考えたからである。

2. 実地研究の日程と概要

		交通等	訪問地・用務等	泊
4/10	火	1210-1240 L304	履修等、説明会	
5/31	木	1435-1605 L304	オリエンテーション ミニ講演会・フォーラムの打ち合わせ	
6/8	金	1310-1500 C527	ミニ講演会	
6/9	土	1300-1730	広島ガーデンパレス 第3回学校間交流国際フォーラム	
7/5	木	1435-1605 L304	事前研究1 個別研究テーマの設定 授業実践研究の内容と方法 日本文化の紹介 (エクスプローリス・ミドルスクール) について内容と方法の打ち合わせ	
8/2	木	1435-1605 L304	事前研究2 授業の教材開発と指導法研究 指導案・教材・教具の交流と検討	
8/30	木	1330-1605 L304	事前研究3 指導案・教材・教具の交流と検討 日本文化の紹介 (エクスプローリス・ミドルスクール) について内容と方法の打ち合わせ	
9/11	火	1435-1700	直前打ち合わせ 日程などの確認、渡航準備 日本文化の紹介 (エクスプローリス・ミドルスクール) の内容と方法	
9/15	土	広島 - 成田 0745-0925 (NH-3128) 成田 - ワシントン 1110-1040 (NH-2) ワシントン - ローリー 1240-1359 (UA-459)		米国ノースカロライナ州 Raleigh <u>Marriott Crabtree Valley</u> 4500 Marriot Dr, Raleigh, NC27612 TEL(919)781-7000 FAX(919)781-3059

9/16	日		East Carolina University 事前打ち合わせと準備	Greenville <u>City Hotel&Bistro</u> 203 W.Greenville Blvd, Greenville, NC27834 TEL(877)271-2616
9/17	月		Wahl-Cates E.S. (Ms. Cynthia Watson) 学校見学・授業実践	Greenville 同上
9/18	火		Wahl-Cates E.S. (Ms. Cynthia Watson) 授業実践・学校見学	Greenville 同上
9/19	水		Duke University	Raleigh <u>Sheraton Raleigh</u> 421 S. Salisbury Street Raleigh NC27601 TEL(919)834-9900
9/20	木		Exploris M.S. 日本文化の紹介 Museum Natural Museum	Raleigh 同上
9/21	金	ローリー-ワシントン 1025-1131 (UA-7139) ワシントン-ニューヨーク 1230-1351 (UA-7365)	ニューヨーク観光	New York <u>Raddison Lexington Hotel</u> 511 Lexington Avenue 48 th Street New York 10017 TEL(212)755-4400
9/22	土		ニューヨーク観光	New York 同上
9/23 9/24	日 月	ニューヨーク-成田 1230-1525 (NH-9) 成田-広島 1725-1900 (NH-3129)		機内泊
11/1	木	1330-1615 C527	体験型教育実地研究発表会 成果の公開	

3. 実地研究授業

3.1 単元名 第2・3学年音楽『静寂』を感じて『日本の音』を楽しもう!!』

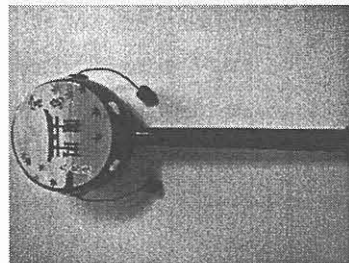
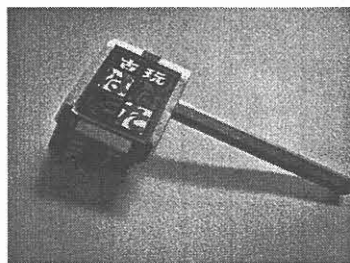
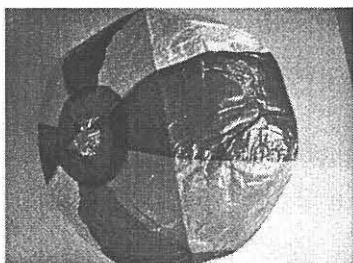
3.2 事前準備

修士論文において初等教育の中でも音楽に関する研究を行っていることから、音楽を用いて授業をつくれなかと考えたことが始まりである。さらに、外国での授業ということで、日本の伝統的な音楽を題材にしようと考えた。

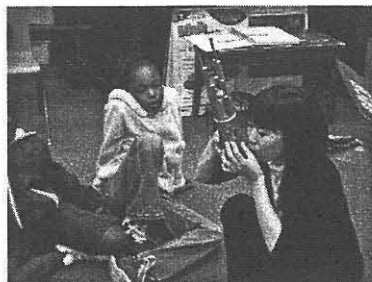
日本の「音」に関わる特徴として頭に浮かんだことは「静寂」である。松尾芭蕉の俳句であったり、「間」を大切に感じる感覚であったり、日本では「静寂」の中に「音（音楽）」を聴くという特徴があるのではないかと考えた。そして、音楽を学ぶ上で、「聴く」という活動はとても重要なものである。「聴く」ということは、何気なく音が耳に入ってきているという状態ではなく、自ら「音」に耳を傾けることが必要である。つまり、「聴く」ということは、自分の心を落ち着けて静かな状態（つまり「静寂」の状態）でいることが望ましいのではと考える。そこで、単元の1つの要素として「静寂」を感じるということを挙げた。

次に、日本の伝統的な音楽を考えた時、真っ先に思いついたのが「雅楽」である。そこで「雅楽」の歴史やそこで使われている楽器の紹介をするという授業も考えたのだが、できれば子ども自らが活動できる場を設けたかったこと、また、先生から「実物に触れることが大切」という助言をいただいたことから、「音楽」まで大きくせずに、日本の「音」に焦点を当ててみようと考えた。

日本の「音」として、何を用いるのがよいかと考えた時、対象が小学校低～中学年であること、また、実物を持っていけることという条件を考えて、日本の伝統的なおもちゃを教材として準備することにした。日本のおもちゃには、音の出るものがたくさんある。また、竹や木、紙など、自然の素材を使って作られているという特徴がある。そういう面にも触れられればと考えた。以下に、授業で用いたおもちゃの一部を提示する。



このように、日本の伝統的なおもちゃを用いて、日本の「音」を楽しんでもらうと同時に、やはり「音楽」ということで日本の伝統的な楽器にも触れてほしいと考えた。そこで、雅楽の中で使用される主な楽器のうちで、「音」という面に注目して筆者が面白いと感じた「笙」を紹介することにした。雅楽で使用される楽器の多くも、竹や木で作られている。特に、「笙」は、一目で竹と分かる作りであることから、材料の面でも、おもちゃと関連付けて伝えられると考えた。右の写真は、実際に授業で「笙」を披露している様子である。



3.3 学習指導案

Lesson Title: Feel “Stillness” and Enjoy “Japanese sound”!!

Lesson Author: Wakako Yano

Date: September 2007

Grade Levels: 2, 3

Subject: Music

Description: At first, teacher will make stillness and students will listen to the sound in the surroundings. And teacher will tell the students that Japanese people tend to like “stillness.” Next, teacher will introduce some sounds peculiar to Japan to American students. Consequently students will notice one of the characteristics of Japanese sounds (ex. stillness) and be interested in Japanese culture.

Objectives:

- To notice that Japanese people have a taste for stillness through Japanese music culture.
- To enjoy Japanese sounds made of bamboos and woods.

Materials, Resources and Technology:

Cymbals, Picture cards, Japanese toys and musical instruments, Shō

Procedure:

- 1) The teacher will make the students still by using cymbals (the musical instrument which reverberation remain).
 - The students will raise their hand when they will feel the sound fading out.
 - The students will feel stillness by paying attention to the sound.
- 2) The students will listen to the sound in the surroundings with stillness.
 - The students will notice that our surroundings are flooded with various sounds(the natural sound and the artificial sound).
 - The students will realize the world which they are not always conscious.
- 3) The teacher will show the picture cards and Japanese sounds (instruments, toys and so on), and then the students will make pairs.
- 4) The teacher will tell that Japanese people often use bamboos and woods in their daily life. And the teacher will show the musical instruments and Japanese traditional toys made of bamboos (ex. Shō) or woods.

3.4 授業の実際

まず、「静寂」の状態をつくるために、音を出した後余韻の残るような楽器(今回はシンバル)を使用し、音を出した後、その音が消えたと感じた瞬間に手を挙げてもらうという活動を行った。どんどん消えていく音に注目することで、自然と子ども達が落ち着き「静寂」の状態をつくることができると考えた。実際に、1回目はざわざわしていたものの、2回目以降は音を聴こうとする姿勢が見られた。次に、「静寂」の状態では、周りの音に耳を傾けてみるという活動を行った。「静寂」の状態では、それぞれの耳が普段よりも研ぎ澄まされた状態になる。そのため、普段、自分の周りにあるのに意識しないような音も聴くことができると考える。実際に、聴こ

えた音をたずねると、エアコンの音や通りの車の音をはじめ、自分の呼吸の音や心臓の音、友達が咳をする音や移動した音など、様々な音を聴くことができていた。

この授業のメインは、聴こえた音がどの楽器やおもちゃから出た音かを考えるという活動である。そのために、日本の伝統的なおもちゃや楽器の写真を準備しておき、授業者が隠れて出した音がどの写真に写っているものから出た音なのか予想してもらおう。子どもの予想を聴いた後、実物を示すとともに、日本での使われ方や日本の曲なども紹介した。この活動の応用として、写真の楽器やおもちゃがどのような音を出すのかを予想した後に、実際の音を聴いてみるという活動も行った。



最後に、日本の伝統楽器の一つである「笙」を紹介し、日本の伝統楽器の特徴として竹や木で作られているものが多いこと、それぞれの地域で音楽には特徴があることを伝えた。その上で、音楽はどんな人でも共有できるものであり、色々な音楽を聴いてもらいたいということで授業を締めくくった。

3.5 考察

予想していた以上に子ども達が大人しく、「静寂」をつくるという活動を効果的に使うことができなかった。また、「笙」が和音を演奏する楽器ということもあり、音を紹介するだけにとどまってしまった。しかし、子ども達は、日本のおもちゃや楽器に大変興味をもってくれており、積極的に発言をしたり活動に参加してくれたりした。

授業者自身の語彙力不足から、指示がうまく伝えられないことも多々あったのだが、子ども達はその状況を感じとって自主的に行動してくれた。特に、周りの音を聴いてみるという活動においては、「周りの音を聴いてください」としか声かけができなかったのだが、心臓の音や呼吸の音など、自分の内面にも耳を傾けてくれており、うれしい反応であった。また、授業後、「Thank you!」と声をかけてくれる子どももいた。このような子ども達の反応から、音楽は、言語という壁を越えて伝わっていくということを実感できる授業であった。

4. 体験型教育実地研究における自己変容

4.1 教育観の変容

授業をするということは、そこに伝えたいものがあるということである。だから、何を最終的に伝えたいのか、何を目標にするのかを考えながら授業をつくるし、授業をする時も、その目標にたどり着けるように進めていく。このように、今までは常に授業の中で「目標」を意識しているつもりであった。しかし、今回、自分が伝えたいことをすぐに言葉にできないという状況に立つことで、目標をしっかりとつことの重要性を改めて実感できた。日本であれば、少しぐらい「目標」がはっきりしていなくても、流れの中で繕っていくことができる。しかし、すぐに思いを言葉にできない状態では、まとめができないばかりでなく、授業の中で起こる様々な出来事に対応することもできなくなってしまう。何も伝えられないということは、とてももったいないことである。1時間1時間を大切にしていくなかにも、何を伝えたいのか、何を目

標にするのかを、自分の中で明確にもてるようにしていきたい。

渡米前は、海外における教育の良い面ばかりを見てしまいがちであった。しかし、実際にアメリカの教育に触れることで、その良さと同時に、日本の教育の良い面も認識することができた。また、アメリカの子どもと日本の子どもは全然違う性質だと思っていたが、実際に関わる中で、本質的には全く同じであるということが分かった。

4.2 自分自身についての変容

使用している言語が違う国に行くことで、初めは自分の思いを伝えることが難しいと感じていたが、様々な人と関わっていく中で、少しずつではあるが積極的に自分の気持ちを出せるようになってきたと感じている。

また、物事を判断する際の視野が広がった。今までは、人の考えであったり、新しい理論であったり、そういったものを受け入れる時、ある一面だけを見て判断してしまいがちであったが、この研修を通して、物事の様々な面を見るということが、自然にできるようになってきたと感じている。

4.3 グローバルマインドに関する変容

互いにコミュニケーションをとる上での言語の大切さを実感した。しかし、言語だけが、コミュニケーションの全てではない。まずは、自分から積極的にコミュニケーションしようとする気持ちが必要なのである。つたいない言語力でも、こちらから話しかけると、相手は理解しようと耳を傾けてくれるし、何より、笑顔で対応してくれる。外国の方と会話をする時どうしても身構えてしまうのだが、そうではなく、「伝えよう」という気持ちでぶつかっていくことが必要なのだということに気づいた。そうすれば、相手もしっかり受け止めてくれるのである。同時に、私達が受け入れる側に立った時、身構えるのではなく、相手の全てを受け入れようとする態度が大切なのだということが分かった。

5. おわりに

今回の渡米により、実物に触れる、本場に行ってみるということの大切さを感じる事ができた。特に印象深いことはアメリカでの授業実践で、Wahl-Cates E.S.において3回も授業をする機会をいただき、大変貴重な体験をすることができた。

10日間という短い期間ではあったが、多くの人と関わり、また、新しい世界に触れることができた。そこで身に付けたグローバルマインドや感じたことをこれからは活かしてこそ、この研修がさらに深い意味をもってくると考える。

今回学んだ積極的な姿勢を忘れずに、次につなげていきたい。